



# 京機短信

No.222 2014.01.05

京都大学機械系工学会（京機） tel.& Fax. 075-383-3713

E-Mail: [jimukyoku@keikikai.jp](mailto:jimukyoku@keikikai.jp)

URL: <http://www.keikikai.jp>

編修責任者 久保愛三

あけましておめでとうございます。

本年も宜しくお願い申し上げます。

2014年 元旦



昨年は色々なことが起こり大変な一年でした。本年はもっと大変な年になるかも知れませんが、元気を失わず、明るい未来のために努力致しましょう。

同窓生が情報を交換できるのもそのために有効な事です。

京機活動の御支援、宜しくお願い申し上げます。

世話人

# 日新館の教育」が放つ我々へのメッセージ

- 同窓会小旅行（会津若松）からの報告 -

1968年卒業 成瀬 淳

## 1. はじめに

我々1968年卒組は今年度の同窓会として10月16日から1泊で会津若松への旅を楽しみました。おりしも伊豆大島で多くの犠牲者を出した台風26号が本州を窺っており、昼ごろに至るまで東北新幹線が運転を見合わせていました。このため参加者全員が無事に集合場所である会津東山温泉の向瀧に集合できるかと心配しましたが、奇跡的にも16名の参加予定者全員が予定時刻までに旅館に到着し、夕食会では久しぶりの再会を喜び合い様々な話題で盛り上がりました。



翌日はマイクロバスを借り切って、会津武家屋敷、飯盛山、戸の口堰洞穴、栄螺堂、旧滝沢本陣、鶴ヶ城、日新館といった史跡を見学しました。どの史跡も想像した以上にきちんと整備されており、見るべきポイントも多く、幸運にも台風

一過の好天にも恵まれて、大変印象的な旅となりました。特に最後に訪れた日新館では予定していた2時間があっという間に過ぎてなお時間が欲しいと思ったほどでした。私自身、当時の日新館の教育指針を目の当たりにして強い衝撃を受けました。以下ではこの日新館が今でも我々に放つ衝撃波に焦点を当てて同窓会の旅の報告にかえたいと思います。

## 2 . 日本の大学で学生は何故活発な発言をしないのか

京機短信 No.128 に投稿したエッセーでも書きましたが、日本人の学生が授業であまり質問をしないということ、また社会人の方々でも国際会議等での発言が少ないということは色々な場面で多くの人たちが指摘する点であり、みなさんにも異論はないことだと思います。実際、私が岡山大学の大学院で行った講義においても、きわめて優秀な学生たちでさえ当初はほとんど発言してくれなかったことを今でも鮮明に覚えています。これについては同No.199で「啄木の教育論」と題した文章で報告いたしました。さらにこの「啄木の教育論」を英訳し、"The aim of education" と題して米国の3大学の学長や先生方、また旧友数名にもメールで送ってみたところ1週間以内に各人から結構詳しいコメントや意見が返ってきました。このような個々人独自の見解を迅速に返信されることは、日本ではあまり期待できないことだと思います。

以上のような日本人に特有なことと思われるメッセージへの反応の仕方はどうのような原因に依るのかについて、諸兄各位はどのようにお考えでしょうか。学生たちへも直接問いかけてみましたし、私自身も少し考えてみました。

### (1) 閉鎖的だった江戸時代の影響がまだ残っている？

哲学者和辻哲郎は1636年の鎖国令、1637年の島原の乱を経て1641年には鎖国の徹底により日本の国際性は完全に失われたと言います。(『鎖国 日本の悲劇、岩波文庫 青144 3) 「鎖国」という用語が広く使われるようになったのは明治以降のことであり、近年では制度としての「鎖国」は無かったとする見方が主流だとのことですが、それにしても欧州で興った科学革命がまさに本格的になるうとした時期から200年あまりの間続いた徳川幕府による人的な流動性がきわめて低い統治体制を通して日本人の国際性が酷く阻害されたのだろうと考えたくなる気がします。

しかしながら、道元(曹洞宗開祖、1200~1253)のような高僧が13世紀の前半にすでに「世上の価値の差別を撥無する事が必要である」と多様性重視の徹底した考えを示したことは、どのような体制であっても深い思考ができる人物はダイバーシティの重要性を説くことが可能であることを示すものだと思います。

このことを考えると、江戸統治の影響説を安易に取ることには同意しにくくなる  
とも思えます。(和辻哲郎 日本精神史研究 岩波文庫 青 177 - 7)

## (2) 「先生からの一方的な講義」という授業スタイルの影響？

学生諸君から大変興味のある見解を聞くことができました。入試対策としての授業において、正解は一つという考えのもとで育った生徒は、「先生の説明が唯一正しいことであり授業ではひたすら先生の話聞き取り、書き写し、暗記し、試験に備えるのが良い生徒であると躰けられる。従って質問したり疑問を呈したりすることはよい生徒の取るべき態度ではないと信じてきた」ということになる。下手に質問などをすると、「君、そんなことも解らないのか。もっと自分で勉強しなさい」との叱責を受けることになる懸念なのです。実際大学院の講義で「少しでも疑問があればどんどん質問をすべきだ」という私のコメントに対して「先生、本当に質問してもよいのですか？失礼になりませんか？」といった真面目な質問を受けることがあります。そういえば我々が学生の頃も一方的な授業があり、ひたすら先生が黒板に書かれるテキストを黙々としてノートに写し取ったことを思い出します。確かに先生の授業スタイルの影響もあるのでしょうね。でも、これだけが「社会人になり会社で仕事を始めた研究者が国際会議や講演会に出席し、ひたすらノートを取るだけで、終わると質問もせず早々に引き揚げて他の参加者から気持ち悪がられる」という事態の原因とは考えにくいかもしれせん。

## (3) 「読み書き算盤」の説

「美しい日本語の話し方」(浅利慶太 著 文春新書)の第1章「日本語について」に以下のような興味深いことが書かれています。「日本の初等教育の現場では、長く『読み書き算盤』が重視されてきました。表示された文字が理解でき、書類や手紙が書け、簡単な計算ができること。それが何より重要だったわけです。子供たちの教育においては、まずは識字率を上げることが国是であったと言ってもいいでしょう。もちろんそれは重要なことです。しかし、いつまでもそれを続けたことは大きな問題を産みました。子供たちは、先生の授業をおとなしく聞き、ノートをとることは上手でも、自分でしゃべることはまったく不得意のまま育ってしまったのです。『読み書き』の後にいきなり『算盤』が来るのではなく、『読み書き話す』でなければならなかったはずです。日本の教育には『話す方法』が抜け落ちており、日本人はそれを共有できていません。・・・まるで、人々の間に『正しく話すことは要求し合わない』と暗黙の了解があるかのようです。」

なるほど、確かにそうかもしれないと思わせる極めて説得力のある見解ですね。よく言われるように、欧米では古くから大切な教科の一つとなっているディ

ベートや弁論術などを我々がきちんと学んだ記憶はありません。プレゼンテーションという言葉に対応する適切な日本語が見つからないため、現在では英語をそのまま、時には「プレゼン」と短縮して、用いています。相手を説得するためにはどのような言い回しが最適かを考えることなど、少なくとも我々の学生時代には学ぶ機会がなかったように思います。日本では寺子屋や藩校の普及により、幕末から明治にかけて「読み書き算盤が広く浸透した」という指摘には説得力があると思われました。

### 3 . 日新館での教育方針

先入観として、「藩校の教育方針はおそらく徹底した読み書き算盤をベースにしたものであろう」といった漠然としたイメージを頭の隅に置きながら、今回の同窓会で日新館の跡地に再現された施設を見学したのでした。享和三年（1803年）10月9日に完成した「日新館」には、孔子を祀る大成殿、素読所（小学。東塾に三礼・毛詩塾、西塾に尚書・二経塾）、講釈所（大学）、礼式方（武士としての礼儀作法を講義する所）、武講（軍事奉行が取り仕切る軍事研究所。戦略・戦術を学ぶ所）、書学寮、和学・神道方、医学寮、天文方等の各校舎・寮のほか、天文台（当時日本に二つしかなかったうちの一つ）、御文庫（図書館）、弓馬刀槍の各道場、師範宅、日本最古のプールといわれる水練水馬池があったということで、それらの施設が当時のままの姿で再現されていました。そして講釈所（大学）には素読所（小学）を卒業した五百石以上の長男と、成績・人物ともに優秀な者だけが入学を許され、また南北学館にて素読を修了した者で、規定の試験に合格すれば、講釈所への入学を許されました。毎月三回行われる講釈会、輪講会のほか、自主研究も奨励されたとのこと。大学は下等、中等、上等に分かれており、最終クラスの上等では経書、歴史他を、討論形式で学ぶ上、自主研究が主体であり、学生同士の論議・討議が重視されたということです。加えて中等以上の者で特に成績優秀で品行方正な者は、江戸に遊学を許され、また全国遊学の制度もあったとあります。

日本人に特有なシャイで引っ込み思案な態度、受け取るだけで決して自ら発信しない我々自身の不可解な態度は江戸幕府の統治の影響なのか、戦後教育の汚点なのか、江戸後期から明治まで更に現在に至るまでの「読み書き算盤」の根性の徹底によるものなのか・・・などと何とはないイメージを持って過ごしていたときに、今回突然日新館の教育方針が目飛び込んできたのですから、この教育方針を示しているパネルの前で私は強力な衝撃波を受けました。

### 4 . おわりに

会津の町は予想通り「八重の桜」のポスターや解説文で満ち溢れていました。

八重と襄の生きざまに思いを馳せながら、もし会津藩が生き延びて天下を取っていたなら日本の教育は全く異なった道をたどり、日本人も世界をリードする国際性豊かな国民性を保持するようになったのかもしれないな・・・などと、夢に浸ったのでした。この点、諸兄のご意見を拝聴したいと思っています。

(完)



楠浦崇央 (1995卒 TechnoProducer (株) 取締役)

今回は、企業における具体的な事例を通して知財戦略を考えてみたい。取り上げる企業は、1985年に創業し、今や世界で1万6千人以上の従業員を擁し、時価総額800億ドルを超える世界的大企業にまで成長した、クアルコム (Qualcomm) である。同社が所有する特許は約7万2千件である。この、知財を武器にした典型的なサクセスストーリーから、我々は何を学ぶことができるのか、一緒に考えていきたい。

### 3. クアルコム ~

21世紀の挑戦者が示す「イネーブラー」というビジネス・モデル

「ビジネスを始める前に、取れる特許はすべてとれ」

Bill Gatesの言葉である。「発明」において「先取り」かつ「網羅的」であることが、非常に重要な意味をもつ。おそらくその最も有名な例の一つは、携帯電話用通信チップの企業であるクアルコム[18]の事例であろう。

クアルコムは、現在世界中で広く使われている、第三世代(3G)携帯電話の通信規格の一つであるCDMA2000という通信技術を開発した。そして、膨大な数の特許でこの技術を保護した上で携帯通信におけるデファクト標準とし、広く使われるようにすることで「モノと知財」の双方を販売(そして市場を独占)し、莫大な収益をあげている。この経緯は「21戦記の挑戦者~クアルコムの野望」[19]に詳しい。同書によれば、クアルコムの創業者Irwin Jacobsは、当時軍事用の暗号通信技術に過ぎなかったCDMA技術を、携帯電話向けに応用するアイデアを思いつき、1985年に起業、10年以上の間にその開発成果を全て一つ一つ丁寧に特許化していった。当時はCDMA技術が一般の携帯電話に使えるとは誰も信じなかったため、その実現性を実証するために通信の基本技術はもちろんのこと、携帯端末や基地局といった、CDMAに関するありとあらゆる技術の開発を行い、その開発成果について特許を幅広く取得していった。その結果、いまやクアルコムの特許を利用せずに第三世代の携帯電話に関する事業を行うことは、不可能とされている[20]。

クアルコムは、自らのビジネス・モデルを「イネーブラー (Enabler)」と呼んでいる。これは「クアルコムと契約すれば、携帯電話事業をすぐに始めることが

出来る」環境を提供する、ということである。これが「クアルコムの特許を利用せずに、第三世代の携帯電話事業に参入することは不可能である」ことを意味するのは、上述のとおりである。クアルコムのHPには、彼らのビジネス・モデルは、研究開発によるイノベーションを、通信用半導体チップと「知的所有権」という形で提供することである、と記載されている。(図2・参照)

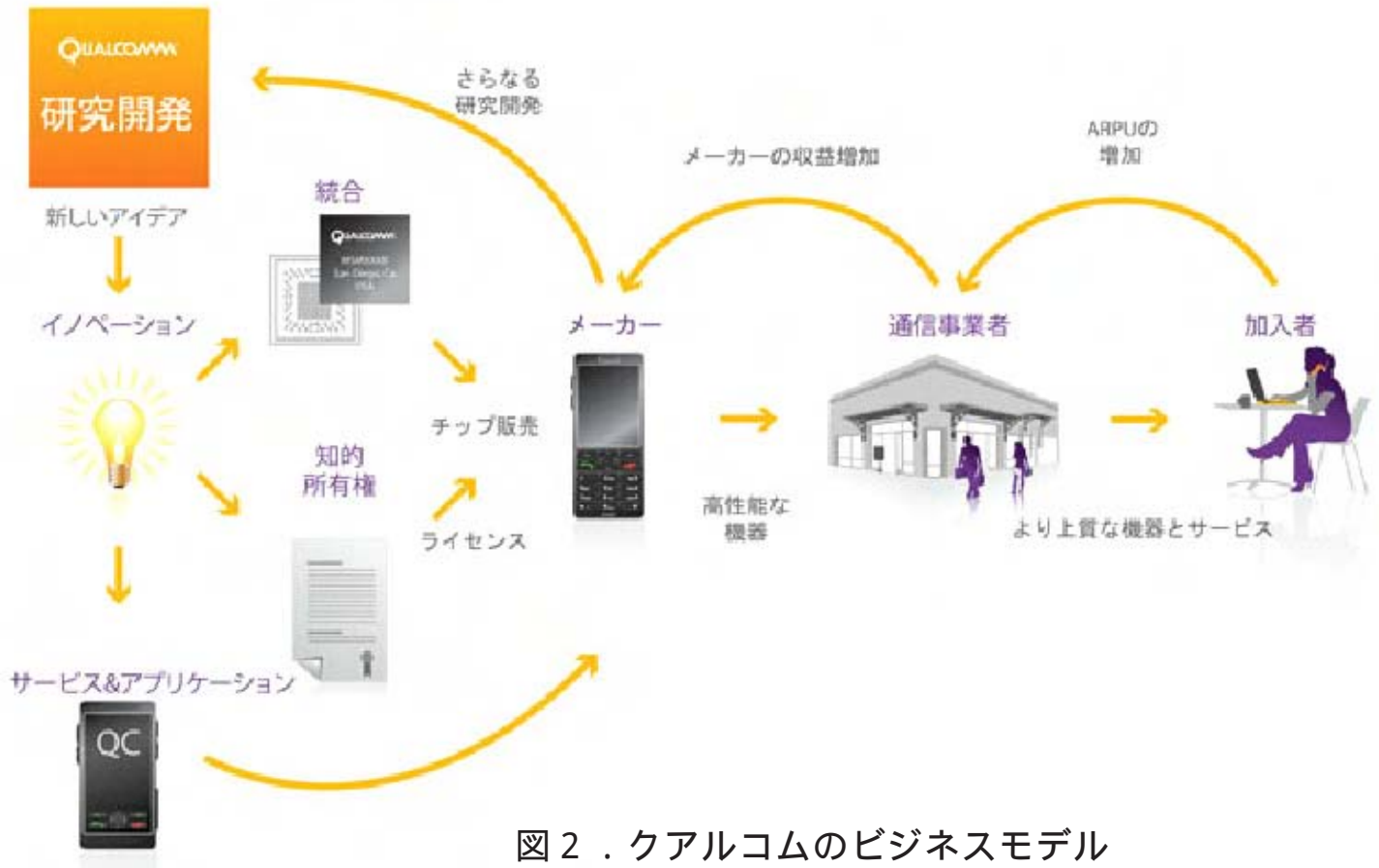


図2 . クアルコムのビジネスモデル

(クアルコムHP [http://www.qualcomm.co.jp/investor/business\\_model/](http://www.qualcomm.co.jp/investor/business_model/) より[21])

< 参考・引用文献一覧 >

[18]クアルコム <http://www.qualcomm.co.jp/>

[19] 稲本哲浩「21世紀の挑戦者～クアルコムの野望」日経BP社

[20] 『NHKスペシャル 世紀を超えて - 世界ビッグパワーの戦略 - 第2集 特許』

1999年4月25日 以下で概要が確認できる

<http://cf.tomangan.org/memo/990425.htm>

<http://www.geocities.co.jp/Outdoors/8093/qualcomm.htm>

[21]クアルコムのHPより <http://www.qualcomm.co.jp/investor/>

[business\\_model/](http://www.qualcomm.co.jp/investor/business_model/)

(つづく)



## 近未来技術フィロソフィー研究会（'66年卒中心の同窓会） 報告 桂キャンパス見学会

平成25年10月18日（金）同窓会の先陣を切って桂キャンパス見学会を開催しました。JR桂川駅（京都駅より2駅西）に、東は千葉、西は広島より、22名の参集を得て、研究会会場『ホテル京都エミナース』のマイクロバスで桂キャンパスへ移動（約15分）し、蓮尾昌裕先生のご案内で約1時間、研究室・実験室などを見学させて戴きました。両室とも明るく広く整然としており羨ましく、又工作室には吉田キャンパスにあった見覚えのある工作機械があり、懐かしい限りでした。メンバーの桂キャンパス感想は「京都市内を見渡せる眺望で、学業に専念出来る素晴らしい環境だが、周りに息抜きの場がなさそうで、少々かわいそうかな？」でした。見学後は、再びホテルのバスで研究会会場まで移動し（約7分）高橋知之君の講演「風車とそのコンポの話」に耳を傾け、近未来を語り合っって旧交を温めました。

次回の研究会は平成27年10月に京都駅前で開催予定です。

（中嶋記）



## 「出遅れ挽回に躍起はOKで汚名挽回に躍起は駄目！か？」

出典元を書く必要がないほど[出遅れ挽回]はよくある表現である。この表現は正しいか？ [失地回復]も同じである。

行き詰ったときには、言葉の定義を明らかにしたうえで、使われ方を並べてみるのが常道である。早速、[名誉挽回]、[名誉回復]はいい、[汚名挽回]は駄目、[汚名返上]または[汚名を雪(すす)ぐ]に改めよの例をを思い浮かべる。その通り・・・か？

[挽回]とは、[失われたものを取り戻す、損なわれたものを元の状態に戻すこと]である。

[名誉が失われた状態]から戻す [名誉挽回]でOK。

[出遅れ = 優位を失った状態]から戻す [出遅れ挽回]でOKと扱われている。

[失地 = 土地・地位・地盤を奪われた状態]から戻す [失地回復]でOKと扱われている。

それなら、何故

[汚名 = 名誉が毀損された状態]から戻す [汚名挽回]でI OKでなく、NGなの？ [汚名挽回]の表現を用いる人は、上の使い方に倣った表現をしているので、間違っていないのである。・・・と私は考えている。

正しい言い回しをどうするのか、状況を正す共通の言葉を探さなければならないのだが、咄嗟(とっさ)に思い浮かばない。多分、対象に応じた言い回しで、[必死に追付く]、[失った地位を取り戻す]とすべきなのだろう。

**1 . 13 年度は底堅い民需と政策効果による押し上げで高成長に**

2013.06.07 日総研究所

<http://www.jri.co.jp/file/report/japan/pdf/6830.pdf>

**2 . 月例経済報告等に関する関係閣僚会議資料**

月例経済報告（平成 25 年 6 月） 内閣府

<http://www5.cao.go.jp/keizai3/getsurei/2013/0613getsurei/main.pdf>

<http://www5.cao.go.jp/keizai3/getsurei/2013/06kaigi.pdf>

**3 . グラフで見る景気予報（2013 年 6 月）**

2013/06/04 三菱 UFJ R&C

[http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/japan/gr\\_1306](http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/japan/gr_1306)

[http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/japan/gr\\_1306.pdf](http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/japan/gr_1306.pdf)

【今月の景気判断】景気は緩やかに持ち直している。マインドの改善を背景に個人消費が底堅く推移しているほか、生産の持ち直しが続き、輸出も世界経済の回復を背景に持ち直しの動きが出てきた。また、公共投資は増加が続き、雇用には持ち直しの動きがみられる。今後も、公共投資、個人消費の増加が続き、輸出の回復が生産の押し上げに寄与してくると予想され、景気は緩やかに持ち直していこう。企業業績やマインドの改善にともなって、足元では弱含んでいる設備投資も、増加基調に転じると期待される。一方、賃金の弱含みが続いているほか、目先は生産の増加ペースが緩やかにとどまる可能性があるなどの不透明材料もある。

【当面の注目材料】

世界景気～米国の金融政策、中国景気の回復力、欧州の債務問題の行方

企業活動～円安と世界経済の回復ペースの高まりが輸出に及ぼす影響、

設備投資の回復のタイミング

個人消費～弱含みが続く賃金の先行きと、マインドの改善を背景に持ち直している個人消費の持続力

金融～量的・質的金融緩和が国内景気に及ぼす影響、債券、為替、株式などの  
金融市場の動向

**4 . 賃金は上がるのか？**

2013.06.04 三菱 UFJ R&C

[http://www.murc.jp/thinktank/economy/easy\\_guide/haya\\_130604](http://www.murc.jp/thinktank/economy/easy_guide/haya_130604)

[http://www.murc.jp/thinktank/economy/easy\\_guide/haya\\_130604.pdf](http://www.murc.jp/thinktank/economy/easy_guide/haya_130604.pdf)

Q 1 . 賃金の減少が続いていますね。

Q 2 . どうして賃金がかかるのでしょうか？

Q 3 . 企業は簡単に賃金を下げたのですか？

Q 4 . アベノミクスで賃金は上がりますか？

## 5 . 2013 ~ 2014 年度改訂見通し

2013.06.10 日総研

- 2013 年度は政策効果で高成長も、2014 年度は反動減でゼロ成長に

<http://www.jri.co.jp/file/report/research/pdf/6832.pdf>

## 6 . アジア経済概況 (2013 年 5・6 月)

2013.06.04 三菱 UFJ R&C

[http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/asia\\_reg/asia\\_1305](http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/asia_reg/asia_1305)

[http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/asia\\_reg/asia\\_1305](http://www.murc.jp/thinktank/economy/overall/asia_reg/asia_1305)

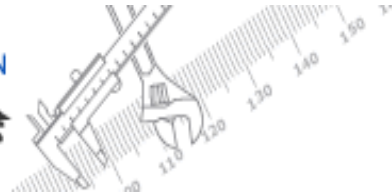
### I . 中華圏・韓国

- 1 . 中国経済の概況 . . . 景気回復のペースは緩やか
- 2 . 中国の主要指標解説：期待される都市化政策による景気の押し上げ
- 3 . 台湾経済の概況 . . . 1-3 月期の GDP 成長率は前年比 1.7% に減速
- 4 . 韓国経済の概況 . . . 1-3 月期の GDP 成長率は前年比 1.5% と横ばい

### II . ASEAN・インド

- 1 . タイ経済の概況 . . . 1-3 月期の GDP 成長率は前年比 5.3% に減速
- 2 . インドネシア経済の概況 . . . 1-3 月期の成長率は前年比 6.0% と横ばい
- 3 . マレーシア・フィリピン・シンガポールの主要経済指標
- 4 . ベトナム経済の概況 . . . 緩やかながら持ち直しの兆しがみられ
- 5 . インド経済の概況 . . . 1-3 月期の成長率は前年比 4.8% と横ばい

### III . アジア通貨・株価動向



# 報告

## KARTの大会結果と車両概要

### ■大会結果

2003年	12月 KART 結成	
2004年	第2回大会	20位/34チーム ルーキー賞3位
2005年	第3回大会	12位/45チーム
2006年	第4回大会	14位/51チーム グッドフレームデザイン賞2位
2007年	第5回大会	6位/61チーム オートクロス2位 ASME-Japan賞
2008年	第6回大会	15位/66チーム ASME-Japan賞
2009年	第7回大会	17位/66チーム 日本自動車工業会会長賞
2010年	第8回大会	9位/85チーム エンデュランス2位 日本自動車工業会会長賞
2011年	第9回大会	21位/87チーム コスト1位 デザイン3位 CAE特別賞3位 最軽量化賞
2012年	第10回大会	23位/82チーム デザイン3位 プレゼンテーション3位 スキッドパッド2位

2013年 第11回大会

1位/86チーム  
 エンデュランス1位  
 オートクロス2位  
 スキッドパッド2位  
 燃費効率3位  
 ベストサスペンション賞2位  
 最軽量化賞3位  
 ジャンプアップ賞3位  
 日本自動車工業会会長賞  
 ICV総合優秀賞  
 ICV特別賞  
 経済産業大臣賞  
 静岡県知事賞

## 2014 年度抱負

2013 年度大会において、ついに念願の優勝をつかんだ現在の KART のチーム体制の礎は、「2 ヶ年計画」にあります。2009 年度、KART は組織的に崩壊し、大会も惨憺たる結果に終わりました。遅まきながら、そこでようやく危機感を抱いた私達は、体制の立て直しを誓い「2 年かけて総合優勝を目指す」という「2 ヶ年計画」を打ち立てました。計画の 1 年目は「強いチーム」・「強い車両」の基礎作りを敢行しました。2 年目の 2011 年度は、大会で勝てる車両をめざし車両をフルモデルチェンジした上で、3 月にシェイクダウンを達成し、大会までに 700km に及ぶテスト走行を行いました。結果こそ総合順位 21 位に終わった「2 ヶ年計画」ですが、2 年間の取組みで KART は優勝を狙えるチームへと生まれ変わりました。しかし、「2 ヶ年計画」で培われた、盤石なチーム体制・高度な車両開発能力・静的審査のノウハウがあったにも関わらず、2012 年度車両も前年度と同様にエンデュランスで完走を果たすことは叶いませんでした。

なぜ 2 年連続で、同じエンジントラブルによってリタイアするという事態が生じてしまったのか。それまでのチームの傾向として、期限間近になってから慌てて作業に取り掛かり、徹夜をして何とか作業を終わらせるというものがありました。この傾向が大会直前まで続けば、当然直前に行われたパーツの追加・変更に関して評価できる時間はごく限られたものになってしまいます。この反省をふまえ、昨年度は車両製作のスケジュールを見直しました。活動場所の移転に伴う制約から、シェイクダウンこそ 6 月初頭と前年度より 2 ヶ月以上遅れましたが、例年 8 月の大会間際になることが多かったカウルの完成を 7 月上旬に達成しました。こうして大会までの残り 2 ヶ月を車両の走行試験に充てることができました。過去 2 年の教訓の上に重ねて、長期間の信頼性評価を行うことで、ようやく我々に欠けていた最後のピース、すなわち「信頼性」を手に入れたといえます。

しかし、長きにわたって我々が据えてきた、優勝という目標を達成しても、決して KART が克服すべき課題が無くなったわけではありません。2013 年度大会から全日本学生フォーミュラ大会はワールドシリーズの一部に位置付けられ、我々も海外のよりレベルの高い大会も視野に入れるべき時期に来ています。現在は海外のトップチームと日本のトップチームの間にはまだ明らかなレベルの差がありますが、数年後にはその差を埋め、日本の枠を超えた活動を行うことも、見据えていかなくてはなりません。その一方、今年度をもって「2 ヶ年計画」を率い KART の一時代を築きあげた 3 名が卒業します。KART を優勝に導いた車両開発やドライビングの知識・技術をいかに現役の世代へと引き継いでいくかが目下最大の課題であり、今後の我々の命運を大きく左右するといえます。

今年度は車両の信頼性を維持しつつ、これまでに行われなかった新たな試みも取り入れ車両開発・調整を進めて参ります。また例年以上にミーティングやドライバー練習を設け、卒業をひかえた上回生から車両製作に関するノウハウやドライビング技術を確実に引き継ぎ、今年度はもとより、来年度以降にかけても現役世代の手で今まで以上のチーム運営が行えるように取り計らっていきます。

私達の目標は今年度も、「総合優勝」です。チーム一同、再び表彰台の頂点に上りたいという思いは少しも衰えておりません。そして、連覇を達成するために必要な今年度の得点目標を、これま

でのデータ分析を基に、以下のように設定しました。(下の列には昨年 2013 年度大会での得点を示す。)

アクセラレーション	スキッドパッド	オートクロス	エンデュランス	デザイン審査	コスト審査	プレゼン審査	総合
65/75	50/50	140/150	365/400	130/150	90/100	70/75	910/1000
60.10/75	48.79/50	144.81/150	369.05/400	125/150	49.37/100	60/75	857.12/1000

昨年度大会においては、優勝争いが総合得点 855 点付近と例年に比べ低くなっていましたが、2 位の大阪大学とわずか 3 点差であったこと、上智大学はエンデュランスにおける周回タイムが我々よりも常に 1.5 秒近く速く、もし完走していれば間違いなく優勝争いに加わっていたことを考えると、今年度大会で確実に総合優勝するためには総合得点が 900 点以上必要になることが予想されます。また、過去 2 年間の大会において我々の強みであった静的審査では、特にコスト審査において各種目中最低となる 13 位に沈む結果となりました。今年度は、減点の大きな要因となったコストレポートの正確性を改めて検証していく予定です。デザイン審査についても、過去 3 年間ほぼ同じパッケージングで車両開発を行ってきたことを考えると、今年度は革新的な考えを盛り込まなければ高得点は期待できません。

一方で動的競技においてはいずれも高い得点となっており、車両の総合的な性能が遺憾なく発揮された形となりました。エンデュランス 1 位・オートクロス 2 位をはじめ、4 気筒 600cc エンジンを積む大学と最も差が開くアクセラレーション競技においても、期待通りの健闘を見せ 9 位に食い込んでいます。今年度は 4 名中 3 名のドライバーが新人であることから、ドライバーを要因とする動的競技のタイム低下を抑える配慮も必要となってきます。優れたドライバーを育成することが、勝利を左右する重要な要素であることは言うまでもありません。

以上の数値目標は、その達成にかなりの努力を要します。「勝って兜の緒を締めよ」という諺がありますが、優勝を果たした次の年こそが、チームにとって正念場となります。学生フォーミュラの世界においては、昔は強かったが今はその面影が見られなくなってしまった、といわれるチームが幾つもあります。この度の優勝が過去の栄光となってしまわぬよう、今こそ我々はこれまで以上に努力を重ね、強豪校としての地位を揺るぎないものにしたいと思います。